



TITLE:

傳統派の社會連帶思想(二・完)

AUTHOR(S):

米田, 庄太郎

CITATION:

米田, 庄太郎. 傳統派の社會連帶思想(二・完). 經濟論叢 1922, 15(5): 662-687

ISSUE DATE:

1922-11-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127964>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號五第 卷五十第

行發日一月一十年一十正大

論叢

交通税の長短 . . . 法學博士 神戸 正雄

傳統派の社會連帶思想 . . . 文學博士 米田 庄太郎

社會哲學^{に於ける}主意的二元論的思想 . . . 法學士 恒 藤 恭

經濟道と經濟術 . . . 法學士 作田 莊一

時論

我國の人口對食糧問題 . . . 法學博士 山本美越乃

食料品市場問題 . . . 法學博士 河田 嗣郎

資料

金輸出解禁問題 . . . 法學博士 戸田 海市

雜錄

戰爭と道德の原則 . . . 法學博士 財部 靜治

物價引下策と抽籤景品附賣買 . . . 法學博士 小川 郷太郎

排マルクス說の新刊書一二について . . . 法學博士 河 上 肇

日銀兌換券發行高の季節的變動 . . . 法學士 沙見 三郎

傳統派の社會連帶思想 (二・完)

米 田 庄 太 郎

(四) ラメンネーの社會哲學及び社會連帶思想

ラメンネー (Lamennais, 1782-1854) はもとカトリック教の僧侶であつたが、千八百三十二年に彼の思想は非基督教的であると云ふ理由で法王から破門された。それで彼は同年後大に圓熟せる彼の思想の時代に於ては、最早傳統派に屬しないと見る人々もあるが、併しさきにも述べし如く、傳統主義を以て嚴格にカトリック教の教義を信奉するものと云ふよりは、寧ろ同教會の權威を統一の理想的典型と認める、獨立なる一哲學派であると思ふに於ては、ラメンネーは一生を通じて傳統派の一人と認められるのみならず、實に其の一大巨頭と認められねばならぬ。是れ彼の最初の大著作『宗教の事柄に關する無關心(或は無顧着)に就て』(L'Essai sur l'indifférence en matière de religion. 4 Vols. 1817-1823) は傳統派の重要著作中最も早く現はれたるもの、一であり、且つ彼は傳統派の哲學を大成した人であるので、彼は啻に同派の社會的及び政治的哲學を徹底的に完成したのみならず、更に同派の認識論、美學、倫理學、辨神論等をも組織的に發展させたからである。傳統派が佛國哲學史上に残せる永久的大作と認めらる可きものは、ヅ、メートルの

著作でも、ヅ、ボナルの著作でもなく、實にラメンネーの『哲學草案』(Esquisse d'une philosophie. 4 Vols. 1841-1846)であるのである。

却説ラメンネーの社會哲學を考究するに當つて、余輩が特に注目すべきは、先づ彼が千八百三十二年に、法王から破門された翌年公にせる『一信者の言葉』(Paroles d'un Croquant, 1833)である。ラメンネーは本書を書きし時から、極端な民主主義者となつたのであるが、本書に於て既に社會問題は其の後社會主義者が解するが如き意味にて、明らかに提出されて居るのである。今全體から見ると、『一信者の言葉』は、つまり惡の權現として壓制の力を盡く事を、目的とするものと云ひ得られる。彼の述ぶる處によれば、世界の現狀を觀察すると、人間の良心に自から一の問題が提出されてくる、夫れは勞働者階級にせよ、又征服されたる民族にせよ、彼等を壓制して居る權威は、果して眞の權威であるか、或は社會に於ける統一及び和合の要求の眞の表出であるかと云ふ問題である。而して良心は之れに對して、斷乎として否など答へる。該權威は利己的利益或は慾情の爲めに使用されるもので、權威の目的に反するもの、不法なもの、老朽せるもので、吾人は誤る恐れなしに、其の破滅を豫言し得るのである。斯くて『一信者の言葉』は默示録の形で書れて居るので全く科學的でない。しかも社會思想史、經濟思想史は、決して本書を看過してはならぬ。夫れは千八百三十三年に出版されて居る事に注意せねばならぬ。此の頃にはルイ、ブラ

ンの『勞働の組織』も、カベーの『イカリー』も、ペクウーの著作もまだ現はれて居ない。又ブルドンはまだ世に知られず、而してラッサレやマルクスはほんの學生であつた。只サン、シモン派とフリーエー派のみが、社會組織に深刻な批評を加へて居たゞけである。併し此等の派に於ては、尙ほ社會の位階制度や資本の權利が尊敬されて居るので、社會問題はまだ其の後社會主義者の解するが如き意味には、解されて居ない。

然るにラメンチーは本書に於て、社會問題の意味を、其の後社會主義者の解するが如き意味に明らかに解して居ると思はれる。本書によれば彼は社會問題の骨髓は、つまり如何にして資本家の掠奪から勞働者を救ひ、資本家の壓制から勞働者を解放す可きかと云ふ事にあると、解して居たと思はれる。而して此の點を明らかにする爲めに、吾人の特に注意す可きは、彼は既に所謂賃銀鐵則の觀念を明らかに説述して居ることである。此の觀念は普通にラッサレの創説と見做されて居るが、ラッサレーが之を説いたのは、千八百六十八年に公にされた『勞働者讀本』に於てである。つまりラメンチーが之を説いてから三十五六年後であるのである。

柳々賃銀鐵則の觀念の基礎となつて居るのは、賃銀制度と貧民との關係であるが、ラメンチーは此の關係を默示的形態に於て述べ、以て賃銀鐵則の觀念、眞意を説明して居るのである。左に彼の言葉を掲げて置く。

「久しき後に最初の人間よりもより奸惡な、又より呪はれた他の人間が現はれた。

彼は人間が何處に於ても益々増加し、且つ其の増加が無限であるのを見て、自から左の如く考へた。即ち余は恐くは彼等の或者を拘束して、余の爲めに働く可く強制する事が出来よう。併し夫れが爲めには彼等を養はねばならぬが、それでは余の收益は減少するであらう。此處に一層良い方法がある。夫れは彼等を無代で働かせることである。そうすれば實際彼等は死ぬであらう、併し彼等の數は甚だ多いのであるから、夫れが大に減少するまでに、余は既に巨萬の富を積むであらう。而して尙ほ常に彼等の數は十分に残つて居るであらう。

今此の多數者は、總て彼等が勞働と交換して受取る處のもので生活した。

右に述べし如く考へて、奸惡な人は特に彼等の或者に向ひ、左の如く云ふ。『汝六時間働け、そうすれば汝の働きに對して余は貨幣の一片を與へる。汝十二時間働け、そうすれば汝は貨幣の二片を得るであらう。そうして汝も汝の妻子も一層よき生活を營むであらう。』彼等は奸惡な人の言葉を信じた。それより奸惡な人は彼等に云ふ、『汝は只一年の半日分か働いて居ない。それで一年の全日分働けば汝の所得は二倍になるであらう。』彼等は尙ほ奸惡な人の言葉を信じた。

今かくの如くにして、勞働の分量は、勞働の需要が増加することなし二倍に増加し、是れまで

勞働によりて生活せるもの、半分は、最早僱主を見出し得ない事になつた。其の時に、彼等の信用せる奸惡な人は彼等に云ふ。『余は汝等總てに仕事を與へるであらう。併しそれには一の條件が必要である。つまり汝等は是れまでと同じ時間働き、そして余は是れまで汝等に拂ひし金額の只半分だけを拂ふであらう。是れ余は汝等の爲めに圖りたいが、併し自分が破産するを欲しないからである。』

然るに彼等も亦彼等の妻子も、饑餓に迫つて居る際であるから、彼等は奸惡な人の提案を受け、且つ彼に感謝した。是れ彼等は、彼は彼等に生活を與へるものと考へたからである。そうして奸惡な人は此の如くに勞働者を欺き續けて、常に益々彼等の勞働を増しつゝ、常に益々彼等の賃銀を減少したのである。』

ラメンネーは『一信者の言葉』に於て、社會問題の意味を右の如くに解したのであるが、然らば夫れは如何にして解決さる可きが。彼は千八百三十七年に公にせる『人民の書』(Livre du peuple)に於て之を企だてゝ居る。今本書に於て彼の論する處によれば、經濟的改良の重要なものは云ふまでもないが、しかも夫れで充分であると云ふ事は出来ない。更に政治的殊に道德的改良が必要である。窮民及び賃銀勞働者の救済は、賃銀勞働者の團結或は組合によりて成就されるのであるが、此の組合を可能ならしめる爲めには、勞働者の間に連帶の精神が普及することが必要であ

り、更に夫れが爲めには、總ての人々に於て義務の念が利己心を壓倒せねばならぬ。是れラメンネーが本書に於て説述する思想の要領にして、甚だ單純であるが、併しラメンネーは學者に示す爲めに本書を書いたのではないことに、注意しなければならぬ。彼の目的はつまり直接に人民に話し、彼等をして彼等自身の生活條件を明らかに理解せしめ、彼等が自から之を改良し得るものなること、其の手段は彼等自身の中に、即ち彼等が自から成就し得る内部的變化に存することを、證明せんとするにあるのである。要するにラメンネーは、貨幣制度の經濟的問題は、遙かに深奥な、又精神的性質の一問題の、單に外部的方面に過ぎないものと考え、而して深く精神的根柢に立ち入りて、其の根本的解決を圖らんとしたのである。而して彼が本書に於て説述する重要な思想は、根本的には大體上三種に彙類し得られると思ふ。

(一) 先づ第一に激烈なる階級闘争に訴へ、只社會の富及び利益を、今日の無產者を利する様に置き替へん事のみを目的とする革命者の方法は、根本的に無効である。かゝる方法は惡の原因を其の儘に保存して置いて、只惡の徴候を變するだけである。勞働者、人民は地上に同胞主義を確立し、神の國、愛の國を建設す可きであるのに、然るに彼等は只自分のみ、只自分の利益のみを考へ、憎惡心と嫉妬必とに燃へて居る。彼等の欲する處は、只富者を斥けて、自分等が其の地位を占めんとするだけである。彼等は時としては正義の念を缺き、而して常に慈善の念を缺いて居

る。

併し此くては惡は決して滅びず、永久に存続するであらう。抑々惡は不正義其の物に在るの
で、不正義によりて利するものが、此の人であるか、かの人であるかに在るのではない。人民の使
命は一の支配を他の支配に替へることでない。誰れが支配するとも變りはない。一切の支配は階
級の區別、隨ふて特權、隨ふて利益の衝突を含み、又上の階級が自分の優位を保持する爲めに作
る法律の力によりて、或者の爲めに總ての人々、或は殆んど總ての人々を犠牲に供することを意
味する。人民の使命、人民の事業は偉大である。彼等は普遍の家族を作り、神の國を建設し、不
斷の努力によりて、神の王國の事業を人類に於て進歩的に實現せねばならないのである

(二) 組合、相互扶助は自然が困窮不幸の原因に、自發的に對抗させる療法であるとするも、しか
も之を破壊的な或は生産的な諸勢力の單なる結合と考へてはならぬ。組合は相互的信用を必要と
する。夫れは組合員の精神的水準に依存する。一致結合は力を造るが一致結合を造るものは、義
務及び義務の服従である。

人民は生活資料を缺いて居る。是れ他人が彼等の勞働の果實を奪取するからである。併し此の
惡は何處より生ずるか。是れ人民は各々孤立して居て、資本と勞働との間の眞の競争を確立し、
且つ之を保持する手段を缺いて居るから、自から防衛する方法がなく、彼等を使役し掠奪する人

人の貪慾に全く支配されて居るが爲めである。然らば彼等は如何にして、かゝる状態を脱することが出来るか。夫れは一致團結すること、組合を作ることによりてである。一人の成し得ないことも、二人かゝれば成し得られ、千人かゝれば更によく成し得られるのである。

併し如何なる組合も、組合員の相互信用、誠實、道德的行爲、隨ふて賢明なる經濟を基礎とするに非らずは、存立するを得ず、榮へることが出来ない。義務の嚴格なる實行は、組合の必要缺く可からざる條件である。更に義務は組合を産み出す原理にして、組合は義務から自發的に生れるのである。

(三) 今社會問題の解決は、革命即ち社會的條件の急激なる置き替へによりて望まれる事が出来ず、之を組合及び組合の道德的條件に求めなければならぬとすると、社會問題は決して一定の日に於て、明確に解決され得ないであらう。人間の本分其物の如く、社會問題の解決は一の化成である、即ち漸次的に實現さる可きものである。併し經濟的事實と道德的進歩との間には、親密なる相互作用が行なはれて居て、一切の經濟的改良は道德的教化の一手段となるを得、又道德的教化の一切の完成は、經濟的改良の一手段となる事が出来るのである。「持續す可き何物も、時の助けに依らずば、或は組織的力の徐々の併し確固たる作用に依らずば、成就するものでない」「解放された勞働、自からの主となる勞働は世界の主であるであらう、是れ勞働は、創造者が

人類に課する人類の活動其の物であるからである」「されば勞働者よ、勇氣を振へ。諸君は自身に於て缺くる處なく、又神は諸君を見捨てないであらう。諸君の努力の各々は其の實を結び、諸君の運命に於て一の改良を導き、而して夫れより連續的に益々大なる改良が成就され、遂に完全に更生せる土地は、一家族が共同的に耕作し、平和に其の收穫を分配する田畑の如くなる日が來るであらう。」「諸君の安寧が増進して、身體の欲望の爲めに盡くす努力が減少するに伴なふて、他の性質の欲望が諸君に於て醒め、之れを充足するに適する營養物が要求されるであらう。諸君は智識を求め、而して之を獲得することが出來るであらう。是れ精神を修養し、學問を學ぶに必要なる手段も暇も、最早諸君に缺けないであらうからである。其の時には今日諸君に於て睡れる秘密なる諸勢力は、諸君に於て新しき實在物として發達し、而して夫れは絶へず普及する知識によりて、又之れに伴なふ藝術並に其の精妙なる享樂の感情、及び眞と美との靜觀が生ずる内部的な、盡さる處なき喜悅によりて、絶へず生長するであらう。」「物質的及び知力的なる此等二種の完成に、第三種の道德的完成が加はるであらう、而して夫れなくば物質的及び知力的完成は、決して成就しないであらう。是れ道德的完成に根柢を有せざれば、如何なる完成も成立しないからである。總て此等三種の完成は相互に連絡し、相互に助け合ふのである。」「

ラメンネーは右に述べし思想を、更に社會哲學の原理に結び附けて、以て其の深義を究明せん

と企だて、千八百四十八年に、彼の最後の著作「第一社會及び其の法則に就て、或は宗教に就て」(De la société première et de ses lois, ou de la religion.)を公にして居る。それで余は更に本書によりて、ラメンネーの社會哲學の根本原理を考究することとする。

本書は「或は宗教に就て」とも題されて居るから、夫れに就て少しく辯述して置く必要があると思ふが、此處に宗教と云ふは、ヅ、ボナルの用ひた新しき意味に解されて居るので、社會的紐帶とか、統一とか云ふと同じ意味のものである。つまり宗教とは再び結び附けるもの、結合するものと解されて居るので、決してカトリック教の信仰を意味するものでないのである。實にラメンネーは本書に於ては、彼が彼の幼年の信仰から離れた事を明に示した處はない。彼の主旨は基督教の教義の辯護をなし、夫れより社會問題の解決を引き出すよりは、寧ろ基督教の教義を斥けるにあつたと思はれる。此處に彼は宗教の概念と超自然者の概念との間の永き因襲的連合を、破らんとする傾向を示して居る。

本書に於ては、ラメンネーは先づ神は宇宙に内在的であると云ふ觀念からして、實在の法則は即ち神的法則其物であると考へ、又社會の法則は自然の法則と異ならざるものと考へて居る。蓋し宇宙は總ての部分が、相互に依存する一の社會であるからである。而して此の社會は三階段をなす。最低階段に於ては無機物の社會がある。是れ無機界は夫れが成り立つ實在物の全體に於て

只諸種類を統一に導く處の一の強き連帶性によりてのみ、存立するからである。此處に吾人は現象の一般的法則の化學的法則や礦物學的法則の如き型の特殊的法則とを見出す。

次のより高き階段に於て、有機的生物の社會がある。植物生活殊に動物生活に於ては、吾人は尙ほ必然的法則に依て支配されて居るが、しかも一層進歩せる社會の一狀態に應ずる一の新範域に入り込む。此處に一層密接なる關係が増加し、且つ種々様々に變化する。動物は道德的自由を缺き、全く本能的法則に依て支配されて居るが、しかも權利及び義務の關係は、彼等の間に段々明白に現はれて居ることを見る。權利及び義務は彼等の間に於ても、人類社會に於けると根本的には同一であつて、只より狭き且つより少なき關係を含むだけである。生物の社會的生活の他の一方面は、各生物が其屬する範域に於て、又只其の存在すると云ふ事だけによりて、種の増殖に協力し、又之を制限する二重の機能を營む事である。各生物は全被造物が依は以て保存される法則に従ひ、右の權能を夫れ夫れの範域に於て行なひつゝ相互に他によりて生存する。動植物は相互に他の營養物にして、相互に他に己の實在及び實在の諸要素を與へる。各生物の死は總ての生物の生活の條件である。而して他の生物形態を産出する爲めに相結合する此等の無數の要素、此等の箇別的形態の絶へざる混雜の中に、より高等な完全な形態への秘密な恒常的な一傾向の存在する如く、又之を實現する爲めの不斷の努力が行なはれる。而して此の相互的破壊の絶へざる仕事は、

最高形態への打ち勝ち難き向上と同時に、又一の相互的愛、其等諸形態の相互的牽引を含む。

最高階段に於て睿智的な自由な實在物即ち人間の社會がある。人間は己を認識し、又神を認識する。相反する行動の動機を彼等に與へる有限者及び無限者との直接的關係に於て、彼等は相對的自由を有し、而して其の自由は彼等の能力が、發達のより高等なる程度に達するほど、益々増大する。此自由は人間に法則を破る能力を與へ、道德的惡を可能ならしめる。睿智と自由とは不可離的であるから、睿智的な人間の社會は、動物社會の連續的進化に外ならずして、同一の原理（一切の存在の普遍的條件）に根本的に依存するとは云へ、しかも同一の根本的法則の支配の下で、畜に一の新しき階段を成すのみならず、又社會の一の新しき部類を成すのである。

社會の起源は一の特殊科學の取扱ふ特殊な問題でない。社會は何處にも存する。是れ宇宙は大社會に外ならぬからである。されば人間社會の始源を探究すると云ふは、つまり星、礦物、植物、動物等によりて作られる下等な社會から、人間社會を區別するものは何であるかを、探究する事を意味するのである。而して人間社會の特性をなすものは、理性と自由とにして、之れによりて法則を認識すること、及び之を破ることが同時に可能となるのである。理性及び自由は歴史の進行中、特殊的諸社會に於て人間的能力が發達するほど、益々著しく表現する。されば道德的惡と之に對する鬭爭とは、人間社會を特質附けるので、斯くて吾人は社會問題に接してくるので

ある。

一切の社會は宇宙其物と同じく、統一の法則と箇性の法則との二重の法則に支配される。統一の傾向なくは、至る處に分散、破壊、絶滅が行なはれるであらう。是れ實在物は彼等に對して存在の根源其物である處の原理即ち神から孤立するからである。併し又箇性の傾向なくは、實在物は神に於て吸収され、神と同一化し、最早實在ではなく、單に可能性たるに過ぎないものとなるであらう。意識と自由とは統一の法則から義務の原理を作り、箇性の法則から權利の原理を作る。義務は犠牲即ち各實在物、各種が他の爲めに存在し、種の鬭爭其物は統一と調和とを確かめる一手段に外ならない處の宇宙の、深奥なる法則と同一である。權利の原理は、動物にありては有機的類型保存の傾向、人類にありては箇別的有機體保存の傾向に於て認められる。權利は宇宙に於て特有の意義を有する。是れ權利なくば箇體は消滅し、絶對的統一中に吸収されて仕舞ふからである。併し權利は義務に、即ち正義に、更に相互的愛に從屬しなければならぬ。然らざれば權利は純利己心、即ち瓦壞と絶滅との原理となるであらう。

かくて吾人は嚴密なる意味にて云ふ社會問題に接してくる。權利の特に著しき表現は財産所有權である。箇性の表現は有機體にして、財産所有權は外部化されたる有機體である。財産所有權は根本的な權利、一の必然的な、破壊し難き惡である、しかも一の惡である。絶對的財産所有權

は社會的關係の破壊の原理にして、之を匡正するものは任意的犠牲である。任意的犠牲は同胞的分配によりて現はれ、宗教は是れまで其の象徴であつた。されば總て道德、宗教、教育は財産所有權を制限し、其の利己的濫用を防止しなければならぬ。財産所有權を一の絶對的權利と考へる人は、社會から孤立する。併し社會から孤立する箇人は、理性的である可き其の本分を充たすことが出来ない。是れ本能的の生活から人間を解放し、其の特性を發達させる機會を人間に與へるのは、社會であるからである。

惡は箇性にある。是れ箇性は神的本質の制限を意味するからである。箇性は自己の爲めに生活せんとする意志が惡なる如く、惡である。されば現代社會に於て呈出される處の社會問題は、つまり惡に對して永久的に行なはれる鬭争の、一新方面に外ならないのである。

併し此の惡に對する鬭争は如何にして可能であるか。是れ一切の神學の裏に隠れて居る問題である。其の解決は神と宇宙との關係、神的意志と人的意志との關係が如何に考へられるかによりて定まる。惡の原理を善の原理と共に永久的であると見る二元主義、論理的に惡を絶對的に否定するに至る分出主義、原罪の宿命的遺傳を信する神學說等は、問題の與料を曖昧ならしめ、其の解決を不可能ならしめる。されば吾人は普遍的必然の自然主義も、亦人間の自由を一の超自然的秩序に全く從屬させる信仰も、共に之を斥けねばならぬ。惡に對する鬭争に於て、前者は全く神

の作用を否定し、後者は全く人間の作用を否定する。此くて兩者共に矛盾を含むのである。

神學的意味に解するが如き超自然的秩序は存しない。併し一は神に、他は被造物に關する二つの秩序が存する。而して此等二つの秩序は密接に結合して居るので、吾人は第一の秩序から離れて第二の秩序を考へることが出来ない。かゝる場合には被造物は實在の一切の可能性を取り去られて、直ちに消滅する。蓋し總ては神から來り、神によりて生きるからである。總てのものは必然的制限の下で、神の實體及び其の實體に本有的なる諸性質に参加するので、かくて單に道德的一致と云ふだけでなく、根本的に現實な、實體的な一致と云ふ意味にて、神に結合されることは、總てのものゝ存在の、第一次的な、絶對的な、必要であるのである。

夫れよりして、必然的に區別されながら、又必然的に結合される二つの秩序に關する、二つの普遍的法則がある。是れ被造物が存續する爲めには、各實在物が其の本性に従ふて箇別的に保存され發達することが必要であり、又各實在物が其の本性に従ふて保存され、發達する爲めには、夫れが一部分をなす全體、及び絶へず其の實在を附與される原本的原理に、常に結び附けられて居る事が必要であるからである。夫れよりして統一の法則と箇性の法則とが成立する。而して之れに對應して、二つの相異なる傾向、一は神への傾向、他は己れ自身への傾向が成立し、隨ふて又同時に此等二つの傾向に従ふ實在物を強制する方面は相反するが、併し均しく自然的なる

二つの衝動が生ずる。而して両者の結合からして、宇宙の秩序或は調和が生まれるのである。

必然が支配する處では、何物も其等の法則の作用に反對しないから、宇宙の秩序は決して變ずることが出来ない。宇宙の秩序は只自由なる實在物の、有効にして放肆な、或は不規律な意欲によりてのみ、擾亂され得るであらう。而して人間は自由なる實在物として、或度に於て宇宙の秩序を亂す力を有するとは云へ、夫れは勿論法則を夫れ自身に於て變更すると云ふ意味ではなく、統一の法則を箇性の法則に従屬させて、両者の調和的關係を混亂すると云ふ意味である。而して人間の有する此の力は、自發性の内部的原理と共に、其等二つの法則の知識を含む。是れ意欲する爲めには認識し、更に愛せねばならぬからである。決定的な牽引力を有しない單純なる知識は、決して行動に化しないであらう。

されば自由は睿智と共に生まれ、其の範域の廣さに關しては、睿智に正比例する。而して睿智は之れに應ずる愛が、同時に生まれるに非ずば、生まれることが出来ない。

惡に對する鬭争は自由の正當なる運用、或は秩序の規定に合致する仕方にて内部的な自由な力を使用することを、意味する。此の鬭争は人間の自然的及び永久的任务、彼の日常の仕事、人間が依て以て存立する法則の力によりて、彼が直接に成就する仕事（併し其等の法則其物に含まれる處の、神の協力、神の働きなくは成就され難き仕事）である。

疑もなく、惡に對する鬭争に於て、自由は其の儘にて存續しない。されど弱められた自由を以て、人間は常に夫れ自身に於て、自から高まる力を有する。人間は自から欲するならば秩序の中に再び入り込み、あるが如き惡實在物から、再び善實在物となり、再び其の意欲に正しき方向を與へて、己れ自身に於て惡を征服することが出来るのである。

進歩とは右の如くに解されたる、惡に對する鬭争である。併し進歩は只被造物の規律的發達に外ならぬから、夫れは惡の原因を弱めつゝ、絶へず惡を減少する傾向を有する。今睿智が發達し、又之れと共に睿智に對應する愛、并に兩者と共に自由が發達するに従ふて、即ち進歩が成就される。従ふて、人間は益々高等なる生活を營み、益々有機物及び其の勢力から解放される。されば人類の改善、或は復元と云ふことは、其の成長と密接に結合する、否なつまり其の成長其物、即ち神へ上る其の自然的運動に外ならぬ。此くて人類に於ては常に善は増し、惡は減するであらう。此の點に於て人々が屢々誤るのは、是れ彼等は國民よりは箇人に、又人類全體よりは國民に着目するからである、又進歩其物の一結果は、人間の知的水準を高め、人間を益々善惡の最上智識に導くことによりて、人間が現に有する善の感情を、彼が尙は缺いて居て、而して彼の目が將來に於て發見する善の感情よりも、弱くするからである。

永久不變な、而して事物の性質の善惡に従ふて、僅に相貌を變するだけの小數の法則が、宇宙

の秩序を支配し、夫れから外れる總てのものを早晚引き直す。蓋し總てのものは、結局其等の法則の力に屈するからである。されば人間をしてよく己れを理解せしめ、彼が己れの内外に於てなさねばならぬ鬭争に於て、決して勇氣を失なはせるな。人間をして信仰を固持し、屈せず撓まず奮闘せしめよ。創造者は人間が通過せねばならぬ無限の途に於て、彼の前に、各勝利に對する褒賞として、新しき、常に益々大なる善を備へて居るのである。

ラメンチーの社會哲學の要領は、以上述べしが如きものにして、夫れによりて彼の社會思想の中に、今日より見るも如何に重要な或物が含蓄されて居るかは、明らかであると思ふが、終りに余は大革命後社會連帶思想を始めて明白に説述したものとて、傳統派の人々の社會連帶思想を簡單に評價して置く。

(五) 一 般的 評 價

夫れ佛國の革命は思想上より見れば、第十八世紀の極端なる個人主義、自由主義の歸結である。而して夫れは封建的諸制度を根本的に破壊したが、併し夫れが破壊し得なかつた一の重大なる勢力があつた。是れ即ちカトリック教會である。されば反革命的反動思想が、先づ同教會内から起つたのは當然である。而して斯の反動思想を代表して最も有力なるものは傳統派であつた。是れ傳統派はさきに述べし如く、單純にカトリック思想を宣傳するものでなく、其の根柢に於

て、近代思想の發達上から見て、甚だ重要視す可き一定の觀念を含んで居るからである。傳統派の根本思想はさきに述べし如く、個人の自律性に反對する權威の思想であるが、同派は此の權威を先づ個人的理性の上にある普遍的理性即ち同派の云ふ眞の理性に於て求めた。而して其の點に於ては傳統派はカント以後の獨逸思想主義の哲學者と同一の方針を執つたのである。尙ほ其の普遍的理性の働きは先天的に現はれるものでなく、社會の歴史的發展に於て現はれるものと見る點に於て、ベークレルの先覺者であるとも云ひ得られる。併し傳統派は一般に其の普遍的理性の歴史的發展を、カトリック教會内に局限して考へた。是れ其の特徴であると同時に、又其の偏見にして、而して此の偏見を脱却して、普遍的理性を考察した點に、ラメンテーの功績が認められるのである。

吾人は右に述べし如く、傳統派の根本の方針とカント後の獨逸理想主義の發達の根本の方針との一致を覺ると同時に、兩者の歴史的關係の問題が、自から吾人の念頭に浮ぶのであるが、ウィンデルバントの論ずる處によれば、傳統派の根本思想はシュレーゲルを通じてフィヒテやノヴァリスの思想の傳はつたものゝ如くに解される。併し是れは尙ほ詳しく研究を要する問題であると思ふ。(Windelband, Fichtes Geschichtsphilosophie, Präludien, Erster Band) 拙著「新理想主義の歴史哲學」後篇(二)第二節參考)

余は先づ右に述べし點に於て、傳統派の根本思想に近代哲學思想の發達上、注目す可き重大な

る或物の含まれて居ることを指示して置いて、是れより特に同派の社會哲學に於ける社會連帶思想の一般的評價を試みたいと思ふが、先づ、ヅ、メートルの思想に就て考察する。

ヅ、メートルはさきに述べし如く、思惟の組織的訓練を缺いて居るが、併し甚だ熱烈に個人主義、自由主義を攻撃して、大に世の注意を惹起したのである。而して彼は革命及び社會的紊亂を詳しく分析して、夫れがルネサンス思想、宗教改革思想及びデカルト哲學等即ち近世の宗教的及び哲學的個人主義の政治上及び社會上に於ける必然的結果であることを論述し、此處に先づ惡に於ける人間の連帶性が證明されて居ると考へたのであるが、更に彼は歴史の考察によりて惡に於ける如く、又善に於ける連帶性が證明されて居ると考へたのである。要するに彼は善惡に於ける人間の連帶性を原理として、人類の歴史、國民の幸不幸、治亂、盛衰を説明し、又人類の將來の進歩を圖らんとしたのである。而して今日の連帶主義も、善惡に於ける人間の連帶性を大に高調して居るのである。但しヅ、メートルは之を根本的に宗教的意味に解し、且つ主として時間に於て之を考へて居るが、今日の連帶主義は全く宗教的意味を斥けて純科學的に之を解し、且つ時間に於ける連帶と同様に、又空間に於ける連帶を強調して居るのである。さはれセクレタンやルヌヴィエー等の哲學者の連帶思想には、尙ほ宗教的意味が明らかに含まれて居ることは、注意すべきである。而して善惡に於ける人間の連帶と云ふことをヅ、メートルの如く宗教的に解するに於

ては異論の起るのは當然であるが、併し之を現代の生物學及び社會學の研究に基き、純科學的に解するに於ては、恐らくは何人も之を承認せざるを得ないと思ふ。

併し、メートルは只人間の善惡連帶の原理を立てるだけでは満足することが出來ず、更に一層深い原理を求めた。而して彼は宇宙に於ける統一の原理及び差別或は個性の原理に到達した。要するに彼の考へる處によれば、惡は差別或は個性に存し、善は統一に存するのである。併し彼は個性を以て直ちに惡であるとは考へなかつた。是れ彼は靈魂不滅を信じ、而して其の信仰は人間の人格性或は個性を離れては全く無意味であると考へたからである。尙ほ彼は統一及び個性の原理に就ては、まだ之を論理的に深く、又組織的に論究して居なかつた。而して傳統派の立場から、此の論究を大成したのは、ラメンチーであつたのである。

ヅ、メートルは又さきに述べし如く、彼の社會連帶思想をカトリック教の教義のインスピレーションによりて立論し、又之れによりて裏附けて居るのであるが、要するに近代社會連帶思想は、歴史的には基督教のインスピレーションによりて發生し、又發達を始めたのである。而して今日の社會連帶思想も結局は基督教の愛の思想や、慈善の思想を、多少科學的な言葉で云ひ表はしたものに過ぎないと云ふ説は、基督教會の學者によりて唱へられて居るのである。之れに對して社會連帶主義者は大に辯明に努め、社會連帶主義の眼目はつまり宗教や形而上學を離れ、實證科學

と倫理的觀念に基いて新しき倫理、新しき社會思想を確立するに在ると主張して居る。余は此處では此の問題には觸れずに置くが、併し歴史的に見て近代社會連帶思想が基督教の影響少なくとも宗教的思想の影響の下で發生し、又發達し來れるものであることは、傳統派の社會連帶思想に於て明らかに認められるのみならず、又實證主義者や新批判主義者の社會連帶思想に就て見るも明らかに認められるのである。要するに佛國大革命後に於ける社會連帶思想は、少なくとも千八百八十年代頃までは、根本的には宗教的思想の影響の下で、發達したものと認め得られるのである。

尙ほヅ、メートルの社會思想に就て注意す可きは、彼は政治的個人主義を宗教的及び哲學的個人主義の自然的結果として、兩者を合せて攻撃し非難することに、専ら力を盡くしたが、併し夫れと同時に亦近世經濟的個人主義即ち近世資本主義も亦、同じく宗教的及び哲學的個人主義の自然的結果と見て、之を攻撃したと云ふことである。かくて彼は自^{オナツ}から勞働者問題、救貧問題にも目を注がざるを得なかつたので、而して彼は一種の復古主義的社會政策を唱へたのである。此の事はつまり、社會連帶思想は如何なる立場から立論されても、勞働者問題と必然的關係を有することを證明するものと思はれるのである。

次にヅ、ボナルの社會哲學に就て考察して見よう。

今ヅ、ボナルの社會思想に於て、吾人の先づ注意す可きは彼の社會の概念である。而して彼の

社會概念に於て先づ注意す可きは、類似と平等を區別し、類似と不平等との結合、或は類似せる人間の、其の「能力及び力」の不平等に基ける結合を以て、社會の真相と見る事である。此社會概念は其の云ひ表はし方に拘泥せずして、其根本思想を摺むと、今日社會學者が一般に社會に就て立て、居る概念と一致して居るので、要するに今日社會學に於ては一般に、社會はつまり類似と差異との一定の結合であると解されて居るのである。次に注意す可きは、ボナルは人間が社會を造ると云ふだけでなく、又社會が人間を造るものであることを説て居る點である。恐らくは第十九世紀に於て社會が人間を造ると云ふ思想を、始めて明白に言述したのは彼れであると思ふが、此の思想は近世社會學の創設者とも云はれるコントの社會學に於て、更に其の後の社會學に於て、如何に重要なものとなつて居るかを考へる時、吾人はツ、ボナルの卓見を讚嘆せざるを得ない。

ツボナルは右に述しが如き社會概念に基いて、社會連帶の思想を立て、社會的奉仕を以て道德の骨髓と見て居るのである。併し彼は不平等の原理の結果として當然社會に階級制度が存立す可きものと考へ、且つ社會連帶を階級間の連帶の意味に解して居る。而して社會問題の解決に於ては一種の保守的國家社會主義を説て居るので、吾人は彼を以て國家社會主義の一先覺者であると認めることが出来ると思ふ。但しツ、ボナルやツ、メートルを始め傳統派の人々は、社會問題の根本的解決は決して經濟的改善によりてのみ得られるものでなく、社會が嚴密なる道德的知力的及び宗

教的統一に導き歸へされる時、世俗的權威が心靈的權威と同様に、位階的に組織され且つ遵奉される時、始めて實現し得られるものなるを強調したのである。要するに傳統派の社會哲學は根本的に宗教的殊にカトリック教的及び貴族主義的である。而して其のカトリック教的及び貴族主義的色彩を全く除去して、之を純宗教的哲學的及び民主主義的に發達させたのはラメンネーである。それで終りにラメンネーの社會哲學及び社會連帶思想に就て少しく考察することゝする。

今ラメンネーも亦さきに述べし如く、眞の權威を探究することから、社會哲學的考究に進んで居るが、彼は傭主が労働者を壓制する權威は己の利益或は欲情を目的とするものにして、眞の權威ではないと考へ、而して其の似而非の權威の起源を理解しようとして、所謂賃銀鐵則の觀念に到達し、而して労働者の解放を以て社會問題の主眼であると見たのである。併し彼の見る處では労働者の解放には經濟的改善はもとより肝要であるが、しかも更に根本的に肝要なるは倫理的、精神的改善である。つまり労働者が自覺して、己れ自身の精神的改造を行なふことによりて、彼等の間に眞に連帶の精神が普及し、又夫れによりて健實なる組合が組織せられ、以て社會問題の眞の解決が成就されるのである。されば労働者の經濟問題は夫よりも遙かに深大な、又精神的な一問題の單に外部的一方面に過ぎないのである。

余は右の如くに、労働者問題は根本的には労働者の精神的改造問題にして、労働者の自覺的

精神的改造、連帶精神の發達及び健實なる組合運動等によりて、始めて勞働者の健實なる解放が成就されるものと見るラメンネーの思想は、當に歴史的に考へて重要であるばかりでなく、實質的に考へて今日甚だ重大なる意味を有つて居ると思ふ。余は現代勞働運動の根本的使命は新文化の創造或は發達にあるから、勞働者階級の自覺的精神改造、連帶の精神及び健實なる組合運動の發達を重要視する點に於ては、ラメンネーの思想を大體上承認するのである。尙ほ總て支配なるものは、之を行なふものゝ何人或は何階級たるを問はず、本來不正義、惡にして、而して資産者階級の支配を排して、勞働者階級の支配を立てんとするは、單に一の不正義、惡に他の不正義、惡を代へんとするに過ぎないので、不正義其物、惡其物を根絶せんとす可き勞働者運動の本來の使命に背くものと見るラメンネーの思想や、又社會問題の解決は徐々に、しかも健實に實現される可きもので、決して急激に即時的に完成される可きものでないと思ふ彼の思想、つまり勞働者階級の眞の解放は、暴力革命的及び即時的に完成されるものでなく、精神革命的及び進歩的に實現される可きものであると云ふ思想は、今日の社會運動の狀態に於て、吾人の大に注意す可きものであると思ふ。

ラメンチーは右の社會思想を、更に深く彼の哲學の原理から基礎附ける爲めに社會哲學を建設したので、其の大要は前節に於て述べしが如くである。而して彼の社會連帶思想は實在の根本原

理によりて確立され、否な社會連帶思想其物が實在の根本的一原理に練り上げられたのである。此處に彼の社會哲學の原理を一々論評する暇はないが、要するに彼の宇宙全體を社會と見る概念、實在の法則を直ちに社會の法則と見る思想、統一の原理と個性の原理との對立并に兩者の關係に關する思想、自由と法則との關係及び自由と惡との關係に關する思想、惡の起源及び惡に對する鬭爭并に其の征服の可能性に關する思想、進歩の觀念等の中には、今日の社會哲學から見て注意す可き重要な幾多の思想が含まれて居る。今日の社會哲學及び社會學に於て、只云ひ表はし方が異なつて居るだけで、實質的にはラメンチーの所説と異ならないものが少なくないのである。殊にセクレタン (Secretan, 1815-1895) やルヌヴィエー (Renouvier, 1815-1903) などの社會連帶説の社會哲學と比較して、ラメンチーの思想を考究することによりて、吾人はラメンチーの思想の眞價を明らかに理解することが出来るのである。それで余は彼の社會哲學の詳しき論評は、別な論文に於て、セクレタンやルヌヴィエーの社會哲學及び社會連帶思想を研究する場合に譲り、本論文を一先づ完結することとする。(完結)